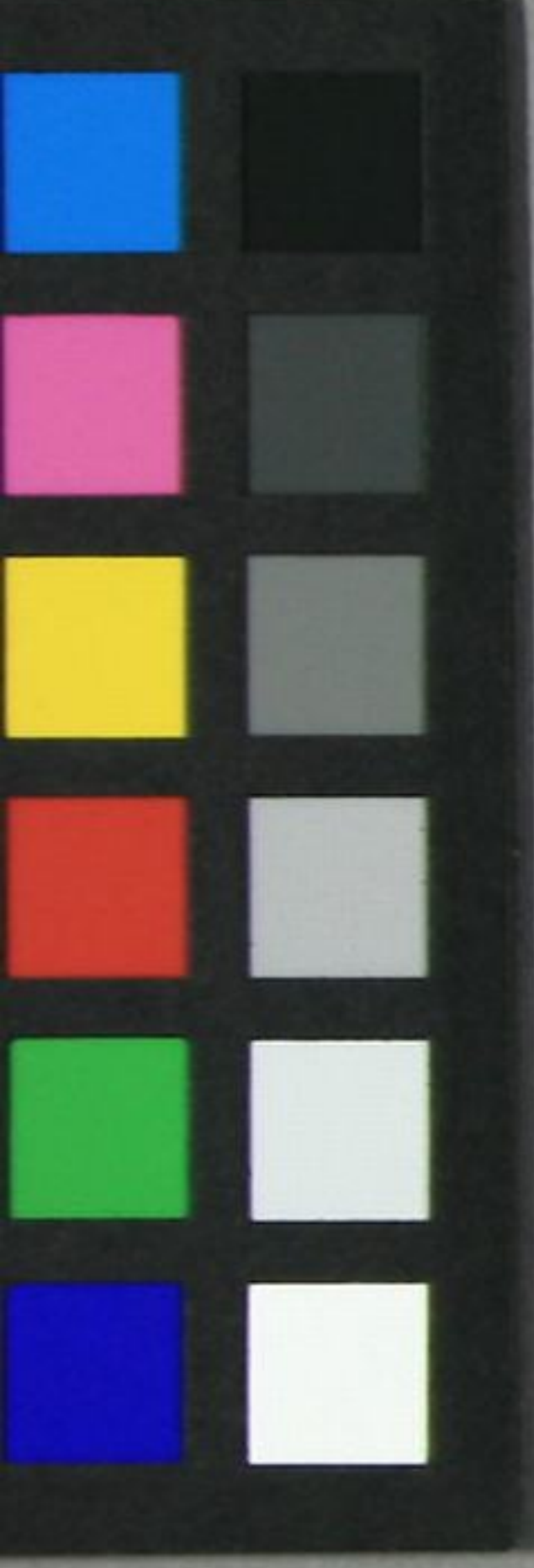
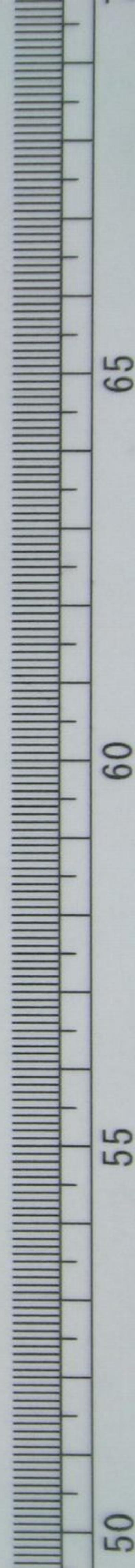




和田定節編輯
浪華史略

七編

中



A414
12

繪本難波戦記三編卷之四

和田定節編

本多忠羽小笠原秀政討死及び真田幸村討死

再説大坂城中小の
大野治長諸隊を巡り視る茶
臼山に至りければ幸村曰ふ天々の事今日を決
ま宜し主公の出るを促せよ主公出づれを刻
軍氣自ら倍老川場の軍由亦胡ふ赴くべしと治
長諾し了城に反るふ秀村己ふ櫓門ふをり継甲

48-7647

と撥錦袍さかきを穿きる槍やりを列つらね旗はたをたつ左ひだり右みぎ整齊せいせいと
列つらを成なりし馬うまを鞍くらを置おき族しゆの秀吉ひでゆき東征とうせい之儀ぎ
の如ごとし將士しやうし踴躍ようえつ時とき小治徳こぢとくの書しよ至いたり其文そのぶんを曰いふ
聞き城中じやうちゆう内応ないおうを約やくする者もの有あり右府みぎふの出軍しゆぐんを族事しゆじ
と舉あげんと欲ほむと僅わずかんで出でること勿なれと治長ぢやうちやう危あやし
惧おそ秀吉ひでゆきの出城しゆじやうを止とどむ而しかし又また往むかひ幸村きやうむらと事ことを
議ぎせんと欲ほむ己おのれふし東軍とうぐん左先鋒させんぽう本多忠弼ほんたうちゅうへき小
笠原秀政おがさわらひでまさ少將せうしやう忠直ちゅうちく直ちよく幸村きやうむら勝永かつえいらの軍ぐんを逼せまり来き

る後のち永えいら銃手じゆうしやうを以もつて相挑あひこむ幸村きやうむら高たかきを登のぼり望のぞ
て曰いふ中軍ちゆうぐん何なんぞ来きらむやと因よて其子そのこ大助だいすけ幸昌きやうちやう
と召よんで曰いふ吾族われしゆ冥東めいとうに在あり治長ぢやうちやう常じやうに我われを猜そし
忌きら我われ當あたふ此こゝに死しまべし汝なんぢ往むかひ右府みぎふに侍しやうし以もつて吾われ
二心ふたこゝろ無なきと明あきくまべしと大助だいすけ時ときふ年とし十六じふろく止とどつ
と俱ともに死しみんとしと請こゝろふ幸村きやうむら叱して曰いふ汝なんぢ死しし
と誰たれに我志われしよを明あきくせん盡じん右府みぎふに殉しゆんする乎やと大
助だいすけ涕なみだを攬かりて去さる款くわん兵益へいよく逼せまり秀吉ひでゆきの中軍ちゆうぐん及び

川場の兵皆至るぞ幸村大谷吉之小謂つゝ曰ふ
事皆睨り是我死する日已と越前の隊將本多成重
阜ふ上り戦状を候ふ忠綱秀政ら森脇永竹田
永應らと銃手と以て戦ひ一が忠綱秀政の軍隊打
ちしめられ引色と顯ハ一けをむ真田幸村之と
望し頃傍軍なり進めやとの指麾ふ従ふ真田の
手勢とせしめ大谷吉之らの一軍鼓譟し東軍
と捲り立るふ必死と胡一たる忠綱秀政らも追々

崩され隊伍乱れ走る本多成重之と援けん
と我軍隊と進め幸村が軍ふ突了入る少る忠直
中軍ふ在りて曰ふ此より直に閻羅の廳ふ入る
なりと固く喰と呼ぶ之と食し食畢つゝ胃と着
左右ふ謂つゝ曰ふ我既ふ食は必ぎ餓鬼とぞ隨
ぞと騎了直ふ衆む大なる如くなれば越前の
全軍奮激し一閑と作り銃と発し恰も大波の押来
るが如く幸村が軍ふ撃ち入り斬れども射せど

も物ともせざ忠直の弟忠昌（後醍醐天皇の皇子）手づから敵の人
 と討取り従兵つよく勇奮し幸村と付あふん
 とぞ戦ひける然れども敵は直回幸村の今日と
 限りの戦闘に目ざしき軍に敵味方と騒ぐ
 さん、さき軍熱練せし従兵と指麾し長蛇鶴翼偃
 月雁行千変萬化の秘術とぞ此処に對れ彼を
 み隠れ縦横に突撃をまふ越前の先鋒は浮足
 立ち見えけまば本多成重吉田修理藤田主馬と

左右の軍と進め真田勢の横と撃つ之の機を得
 る先鋒中軍一齊に倅と固め三方より真田の軍
 と撃つこと劇烈なり先刻よりの戦ひは軍勢多
 く撃れければ幸村も戦ひ果て是迄なりと自ら
 馬と躍らし越前勢に斬り入り血戦し其勢も数
 々廻り小傷を負ひし時、西尾の作と名乗る幸村
 小浜り合戦し戦ひしが幸村に重創し進退自在
 となりざれに遂に久作がるに撃つられぬ幸村其

第四十六隊は死なししふ大谷吉之其他の從
 兵皆思ふ程死つゝ死を越る勢ひ弱ひし衆に殘
 兵と逃散るゝ安井ふ至れり安ふ宿劔兵傷政
 友の初め越前ふはく後大坂ふ歸し書て忠直ふ
 送つて曰ふは善馬なり君猶回情と記すわ
 一疋を賜へ以て死せし忠直馬を予ふ政友騎
 岡山より幸村の營ふ至れば既に陣なり政友曰
 ふ此以て死せし可き字と雖も越前の軍を胃し

幾死せしか忠朝ハ森篠永らと戦ひ軍隊お
 退きしと傍り百里となぐけし聖馬ふ跨り真先
 ふ進み出雲守此ふ在りと叫りし幾ふと見
 るより款兵忠朝と聲ふんと迫り来る忠朝槍
 と執り二人と殪せ款兵一人銃を以て忠朝と狙
 ひ撃ふ誤む其腹に洞く大剛の忠朝ありし由ひ
 る馬を馬と下り刀を援て其款を討取る忠朝の
 圍者鉄槌を進む乃ち左ふ槌を奮ひ右ふ刀を揮



之の血ヲ忠を本
圖つ戦は朝も多



石小川にぞれむ二十餘處の創と被り溝と踰え
く僵る敵兵其首と争ふ從騎大屋作左工門尸の
上小伏し敵と打て死しつゝ松永の軍勇を退み
永應の軍と接けとも小笠原秀政と撃つ永躬
自ら力戦しつゝ終に死し其長子信濃守忠修由
損槍の下に死し少子大孝助忠真創と被り死な
んと歎む其臣法多見雄敵安積覺兵謀ら忠直と

扶けて營に還る是より先城に明石守重ハ驍騎
三百と以て川場と發し約と違へば桑田山に至
らん幸村の軍敗れしと聞き道と轉つて生
玉不出下んとて時小水野將成恭の軍の命と奉
け所部の軍隊と率ひ佐吉小赴かんとして左軍の
戦ひ作るや望道と轉つて天王寺小向ひ行々敵
兵と破りて川場小趨らせ端々守重は兵小遇
ひ交綏ふして北の方小向ふ阿部儀中守高木主

水正將軍の令を以て大番但を留し守重を邀え
 撃つ守重放し退きたり諸右先鋒新田利光の
 一軍ハ隊將伴八弥安見右近らと先とて岡山
 小備へて大野治房の軍と衝突し書院番三隊進
 進む治房邀え撃ち退し後放有り治房奮激遂に
 東軍の幕陣を破り斬りて秀忠の麾下小逼る本
 多康俊遠坂但馬其他の諸將ら横ふ之と撃つ治
 房の軍くく一むし退き又返り来つて福原小

戦ふ先鋒の諸隊奮戦大いに治房の軍と放り治
 房遂に脱れし城に入る時小森孫永外田永應ら
 本多小笠原の両將と討取り皆ひ小笠原前軍
 家康の麾下小逼る酒井忠世榊原康勝らの諸將
 進んで孫永と戦ひつゝ決せむ井伊直孝は
 半高虎孫永の横を撃ち軍の後を断つて勇進
 以孫永永應ら放し退く大野治長の軍代つて
 進み銳手と以て戦ふ直孝は虎ら奮撃治長支ふ

ること能はむ七隊長ら又邀え戦ひ直孝高虎ら利
 あふむ安藤直次前將軍の令を以て諸軍を督し
 逐戦し遂ふ之を破る兩軍の戦ひ酣なる埃塵大
 けり起り彼も此も終終し了轉むむ阿部正次以
 る東兵果を冒し来り面目皆黒し城兵は吾以乃
 ち令し之曰ふ面白き者ハ敵兵なりと物色ふ因て
 數十級を斬る諸隊相付て之を倣ひ斬獲算無一日
 已ふ平を過ぐ茶臼軍人として城に入らせ和を議

せしめ了曰ふ封を大和に徙さば兵を弭んと定
 君乃ち秀頼をして治長及び速水守久を召還さ
 しむ二人旗を旋くし城に入る大坂の諸軍望
 し見相驚擾て曰ふ城中乗有るなりと東軍乃ち
 齊しく進み城兵後ろを敵に逐ふ大いに潰ゆ左
 右の東軍鼓譟して進撃するごとく首を斬ること
 一万五千級茶臼軍進んで茶臼山ふ上り將軍進
 んど岡山ふ上り少る忠直進んで川場ふ至り火

市舎いちやに縦たてつ時ときに秀ひで頼より橋門はしもんに在あり胡床こどに據かり
治長ちやう守久しきうと迎むかえ見みる大助だいすけも亦また至いたり幸村きむらの遺命いめい
と叙の了り其語そのごつまご畢はるるに潰兵さいへい大おほく至いたる秀
頼より曰いふ我將われまさに出戦しでせん死しと決けせんとと守久しきう之これと
止とめ了り曰いふ潰兵さいへい路みちに填みつ出いで戦いくさふべしとぞ徒ただに
小徒隸手せうていれいしゅに死しせんとなり一いつの寧壁ねいへきを嬰えいと一いつの固こく守まもり
力窮ちからきへまつて死しせんとおもふとぞ魁かいとぞと秀頼より之これ
に従したがひ返かへつて千席館せんじやくかんに坐まさ東軍勢とうぐんせいに紫むらと諸隊しよたい

齊いっしく関かんをとつくり鼓つづみを鳴なら一いつ城下じやうげに攻詰せうせつめ我
衆しゆ入いるといひめけり此時このとき城中じやうちゆう内應ないおうと有あり者もの
あり治長ちやうの第たちを焚やく焔煙えんえんの起おこると有あるとより少
乃忠直のちうちうの一軍いっぐん高藤かうとう橋はしより突進とつしん一いつ系橋けいけう口の門かどを
破やぶつて入いり懺さうと城上じやうじやうに植えたり是こゝを先登せんとう第一だいいちと
爲なる又また大坂おほさかの庵人あんな大隅だいごと五左工門ごさくもんなる者もの反かへて謀
里火りと庵あに從したがち敵宇てきうに延焼えんせう焔煙えんえん天てんと衝つく是こゝに
於おに城兵じやうへい大おほい小擾せうれ強きやうぎ防戦ぼうせんする者ものなり一いつ奇手きしゅ



秀頼淀君
及ヒ天主
關ニ自
セントス



の大兵踴躍し諸門を破つて城に入りしに、良列津
川左近馬表と牙旗を懸げ、十席館に至り、駢跪誓
首して言つて曰ふに、臣も當ふ城外に死なば、願
ふも掌どる所の表幟先君以て主公に傳ふる所
五畿七道四海の外苟も目有る者親ざることを
して之を識る之を若し、款人不委さへ信へ親
しむるを、
良列は自ら不殺せんとて
てを還さる耳と而して、良列は自ら不殺せんとて

願して守久し、謂て曰ふに、去歲之役吾策を献し、款の
希軍を襲ひ、火を牙當ふ、從んと欲を公に聴せ、是
終天の憾なり、予己に不此に至り、之を言ふも益な
しと、因て甲を卸し、其母衣を脱ぎ、床上に置いて曰
ふに、是はこれ先君の賜、今ふして之を致す、吾事畢
し、と遂に割腹して死す、其子良義又死し、真宗
伝中島氏種相繼いで自殺せ、其子村吉安内城に
入るとせし、火熾し、てを得、乃ち二城の

橋上きょうじやう小自殺こじく在あ堀田ほりだ正高まさたか傳でん小第せうだい小返こへ了りと得え妻さい子こ
 と手て又また一いて出いで加賀かかの兵へい廳りやう小室こむろ入いる小過こあ以も健けん
 聞きこつて死いを秀ひで光より光より流なが君きみとまトまさお小天主こてんしゆ關かん小自殺こじく
 せんと屯とん守し久く之のと止とめ了り曰いふ終しゆう終しゆう常じやうなり清せいふ
 留しうく之のと祐すけと乃なち親おや月つき樓ろうより東ひがし櫓やぐら小上こかみり見みれ
 煙えん齡れい隨ずつて至いたる小上こかみり治ち長ぢやう秀しう光こう及および淀よど君きみら
 國くに莊しやう倉くら中ちゆう小徒こた一い守し久く孫そん永えいと共とも小之このと獲とれり
 是こより先さき泥どろ田でん利り隆りゆう尼にヶ崎がさきと登のぼり路みち小上こかみり其その烟えん

望のぞみ馳はせ了り神かみ寄よと濟さり級しゆう兵へいと要え望のぞ一いて守し
 首くび級しゆうと得え石いし川がは忠ちゆう徳とく系けい極ごく忠ちゆう高かう同どう高かう知ちと高かう規ぎと癸みづ
 一い款くわん昭しやう仙せん石いし宗そう也やと備び希き島しま小戰せうせん以も之のと級しゆうる毛もう利り
 秀しう元げん加か後ご明めい成じやう水すい軍ぐんと以もて信しん法ぽう港かうに小至こいたり松まつ平へい
 系けい壽しう金きん森もり可か重じゆう尋じん了り至いたり皆みな首くび級しゆうと獲とたり淺あさ井のゐ長ぢやう
 嚴げん蟬せん須しよ賀か至いた領りやう最さい由よし後ごれり至いたる其その佗た遠えん地ぢの候こう伯はく
 皆みな及および前まへ將しやう軍ぐん胡こ床と小據せうそり火ひの起おこる望のぞみ見み左さ
 右みぎ買かる系けい之の事ことと更さら者もの有あり乃なち願ねがふ之の小謂こゐて

曰ふ吾復捷と己ふ〜〜將軍來り賀を希ぶ將軍曰
ふ汝の功なりと忠直來り見ゆ乃ち其母と執つて
曰ふ廼公孫と謂つ可〜と義直が宣後軍より馳せ
諸軍の腦重途ふ屬一争ひ進むと見が宣曰ふ是
の軍既ふ捷ち將ふ舍せんとするなりと己ふ〜
天主閣煙舉るが宣咄嗟〜了進み茶田山ふ至る
ふ諸が賀する者大ふ聚るが宣海を攬る曰ふ大
人鬼と後軍ふ置きるふ及ばざ〜むと松平右衛門

門太夫正綱曰ふ君十四光前途修遠功を建てるを悲
し〜乃ちふなとが宣色と変て曰ふ吾復十四
歳尚功を為すの時有人乎と希が軍曰ふ汝此言
以て首功ふ當るふ足ると治長猶和議を恃と止
書と西が軍ふ致して曰ふ群臣が〜い〜の自殺して
以て右府母子の命と金ふせんと固て秀がの吏
人徳川氏と清姫ふ侍擁護と出さるるふ女子ら
葵章衣と蒙り乱兵中と霧歩む城將堀内氏久之

と観て進んで其希ふ當り人々辟て出で東將候
と成て呼び夫人を護送せ治長米村権右衛門
と遣へしお多正信小因て其意を言ふ正信希
軍小啓希希軍喜んて曰ふ吾其妻と姑とを免
せと正信又將軍秀忠小啓希秀忠叱て曰ふ盡
乃夫と俱死せざるを希希益使を榮へし命を乞ふ
日己小暮なり

繪本難波戦記三編卷之四終

